

ブレンターノの時間空間論に於ける『プレローゼ』 と『テレイオーゼ』の概念に就いて

野村, 重喜

<https://doi.org/10.15017/2544122>

出版情報：哲學年報. 12, pp.116-132, 1952-01-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



ブレンターノの時間空間論に於ける『プレローゼ』と『テレイオーゼ』の概念に就いて

野村 重喜

周知の如くライプニツは「時間を以て事物の單なる繼起の秩序、空間を並列の秩序」と見做したのである。彼は「空間は單に關係に於てより以外のものに於て存立してゐるのではない。ある一つの物體及び此のものの部分が他の物體に對して距つてゐると言う理由に依つて此の物體とその部分には場所性が所屬するのである。」(Psychologie, III, 114) 時間的なものについても同様にまた「我々は時間的なものを他の時間的なものとの關係に於てのみ把握してゐるのであつて、此の時間的なものを絶對的な表象に於て把握してゐるのでは決してない。」「我々はある種の絶對的な時間差異についての表象を有してゐる事なしに、前後についての表象を有してゐる。」(Psy., III, 103) と言う事を主張したのである。即ち時間空間は單に關係に於て始めて存立し得るものであり、時間空間的なものはそれ自身で絶對的に規定されてゐるのではないと言う事を主張してゐるのであるが、かう言う彼の考えに對して、ブレンターノは絶對的な時間空間的なものが如何なる意味に於ても存在しないで、相對的な時間空間規定のみが存在すると云う事は不可能であると言つて、決定的に反對してゐるのである。ところでブレンターノに依れば「我々の全ての表象は、此の表

象に一般性と言う性格を與えるところのある種の不定性を有している。」(Psy. III, 98) のであるから、此の絶對的な時間空間的なものも最種的にではなく、一般的に規定されて直観の中に與えられていると言うのである。⁽¹¹⁾「比較關係の一般的な表象が問題である他の場合に於てと同様に、此の場合にも絶對的な時間空間的な規定が一般的な形で含まれていると言う事を人は注意深く分析しさえすれば、認識するであろう。……従つて實體の一般概念が內的に知覺されたものの中に現象している様に、時間的空間的な關係が直観の中に含まれている場合には、時間的空間的なものの概念が我々の直観の中に含まれて現象してゐるのである。」(Psy. III, 117) では絶對的に時間空間的に限定せられてゐる時間的なもの、空間的なものは我々には何如なるものとして現象してゐるのであるか。布伦ターノに依れば、此の空間的なもの、時間的なものは相對的にではなく絶對的に把握されている實體として現象してゐるのである。⁽¹²⁾

「時間的なものの概念は時間的なものが實體的に限定されている限りでの、即ち實體を含んでいる限りでのその時間的なものの概念と一致する」(Psy. III, 118) と語られてゐる。だから布伦ターノに依れば、時間的なものは實體及び實體的に限定されているもの(偶有的なもの)として現象してゐるのである。空間的なものについても同様に主張される。「空間的なものと言う一般的な類に關して言へば……此の類もまた先ず第一に實體的なものに、そして實體的な主語を通して實體の諸偶有的なものにもまた所屬してゐるのである。」(Psy. III, 119) と語られてゐる。時間的なものと同様にまた布伦ターノに依れば空間的なものは實體及び實體的なもの(偶有的なもの)として現象してゐるのである。

以上布伦ターノは時間空間規定を相對的なものとしてではなく、實體の規定として絶對的に把握してゐる。即ち時間的なもの空間的なものは實體としてより以外には存し得ない事を主張してゐるのである。

(一) 此S點に關し、Kantstudien, XXV, Zur Lehre von Raum und Zeit, 12.に次の様に述べられている。「或人が他の人より倍額の財産を有している事を知りたるにせよ、私はある人の財産の絶対額が幾何であるか、全く知らぬかもしれぬ。がしかし彼の財産が何程かの一定額であると言ふ事、これは私にとつては、それにも不拘、勿論既定の事柄である。何人か此れを否定するならば、彼は獨立に存在する一般者を説く例の極端なる實在論者の誤謬をまさしくも犯すであらう。何故かと言へば倍額の富なるものは百萬兩の富豪に在り得ると同様に單なる千兩百兩の所有者にもまた在り得るが故である。極度に千差萬別を極むる絶対的種別化は優に思考し得るが、各々の有する種別的絶対量が缺けていと言ふが如き事は到底思考し得べき事ではない。だから物理學者達に於ける時間空間的なものの單なる相對性の主張は私にとつては常にグロテスクなものであつた。更に一層奇怪な一事は、既に彼のドクトル論争にあたつて、個別化されざる一般者の存立を同意し難いものとして、決定的に排斥したところの哲學者ライプニッツがかかる過失に陥り、それに伴へる見易い不合理なる歸結を一つも氣付かなかつた事である。」(和田治平氏譯二十頁)と言われている。また Psy, II, 269, Psy, III, 117. 参照

(二) Psy, III, Abschnitt II, Kapitel 1, 2, 4. 参照

(三) Psy, III, 103 f. Psy, II, Anhang XIII. XVII. Kantstudien, XXV, Zur Lehre von Raum und Zeit, 13 参照

(四) Psy, II, 271. Kantstudien, XXV, Z. L. v. R. u. Z. 17 参照

實體は空間時間的なものとして現象していると言ふ事を上述したが、以下此の實體は時間空間的なものとして如何なる姿に於て我々に現象しているのかと言ふ事、即ち實體が時間空間的なものとして現象している場合のその現象の仕方を問題にしよう。ところで實體は時間的なものとしては、現在者としてのみ存在する事が出来ると言ふ事を疑う人はいないであろう。此の現在者について、フレンターノに依れば次の様に言われている。「此の現在者は孤立せるものではなくして、むしろ持續しているものであるか、終るものであるか、始まるものであるかである。現在者は以前

か、以後のものに對する連續關係なしには存在し得ない。それ故に現在者は、一面それから現在者がより少く距つてゐるところのものと連關し、他面それから現在者がより多く距つてゐるところのものとも連關して存在してゐる。現在者がかかる連關を有して存在してゐるという事は現在者の概念の中に横わつてゐる。従つてかかる相對的な性格なしには、現在者は思惟され得ないであらうし、時間的に持續し經過するものの要素 (Element) にもなり得ないであらう。ところで此の現在者はかく持續し經過するものの要素であり、此の現在者と言う要素から言つてのみ存在してゐるところの連續的なものの要素なのである。」(Psy, II, 257) それ故に「現在は時間連續體の限界 (Grenze) としてのみ可能であるから、一次元的連續體に所屬してゐるという性格は現在の様相にとつて固有なものである」(Psy, III, 83) 従つて實體としての現在者は未來或いは過去に限界付けられてゐるものとしてのみ、即ち現在者は現在ある事に依つて「時間連續體の限界として」のみ存在してゐるのである。換言すれば現在者は自己の有してゐる限界に依つて限界付けらるる連續體に「連續的な相對性」(Psy, II, 261) に於て、「本質的に所屬する事」(ibid) なしには存在し得ないのである。それ故に現在者の所有してゐる「限界が此の様に連續體に所屬してゐる」と言う事は此の限界の本性に屬する。」(Kategorienlehre, 217) と言われ得る。此の事の必然的な結果として次の事が生ずる。「連續體は限界に依つて制約されて現象してゐるばかりでなく、限界は連續體に依つて制約されて現象し、しかも限界の本性に於て限定されて現象してゐるのである。例えば點が圓に所屬してゐるか、或は圓と接觸してゐるところの直線に所屬してゐるかに應じて、此の點は本性上異なるからである。」(Kant, 170) 限界付けてゐるものの此の様な限界付けの仕方、即ち連續體に本質的に所屬するものとして、此の様に制約されてゐる限界の本性をブレンターノはプレローゼ (Plerose) と名付けてゐる。凡そ限界に依つて制約されてゐる限りのものは限界を制約してゐる。かく本

性上制約されている限界の在り方がプレローゼなのである。従つて此のプレローゼは限界が連續體を限界付けている仕方の相違に應じて異なるのである。例えば空間的な點のプレローゼの差異に關して、「限界點が一つの方向に對して限界であるか、或はより多くの方向に對して限界であるかに應じて、プレローゼは異なつて来る。」(Aristoteles und seine Weltanschauung, 37)「限界の連續體に對する連續關係に於て、限界はある場合にはより多くの方向に對して限界であり、他の場合にはより少ない方向に對して限界であり得ると言う事が言われるが、此れは私がプレローゼの差異と呼んでいるところの差異なのである。」(Kate, 170)と語られている。限界が連續體に所屬する仕方、即ち限界付けている仕方は一樣でなく、多種多様に異なつてゐる。此の差異がプレローゼの差異として現象してゐるのである。では此のプレローゼは如何なるものとして規定されているのか。プレローゼと言う言葉はもともと充實 (Fülle) を意味するギリシヤ語の πληρωσις からフレンターノが作つた言葉として、限界の充實の仕方を言い、プレローゼの差異とは限界の充實の差異、即ち充實の多少をさすのである。⁽¹¹⁾

(11) Kate, 72 f. 51, 217, 317, 321, Psy, II, 261, 312. 参照

(12) フレンターノはまた此のプレローゼを次の様に規定してゐる。「プレローゼの差異に於ては正に本來諸部分が問題なのである。」此のプレローゼの差異に關して言へば、「點に於ける點の場所性の量が増大したり減少したりするのである。」(Kate, 73)「プレローゼの差異に關しては、點の諸部分の脱落が問題なのである。」またクラウスは「プレローゼと言う言葉 (ギリシヤ語のプレローシス) は充實を意味してゐる。従つてプレローゼの多少は限界の充實の多少を意味してゐるのである。此の二つの限界もまたある種の意味に於ける多くの部分を有してゐる事になる。此の多くの部分は全て現實化されてゐるか、或は部分的にのみ現實化されてゐるかのいずれかである。」(Psy, II, 312)と言つてゐる。此の場合プレローゼは「限界の量」「限界の

部分「限界の場所性の量」として規定されているが、此の「部分」「量」も共に本來的な意味での延長者たる部分として解されな得いから、「限界の量」「限界の部分」「限界の場所性の量」は全て限界の充實の多少を意味しているのである。

此の様に此の限界の充實としてのプレローゼには差異、即ち充實の度が考えられるが、此の充實の度には完全なものと、不完全なものとが存する。例えば空間の限界に關しては物體の内部の限界は物體の表面上の限界よりも、プレローゼに關してより完全であるばかりでなく、全く完全なのである。⁽⁷⁾と言うのは内部の限界は思惟可能な總ての方向に對する限界であるから。此の事から空間の限界のプレローゼの完全性と言う事は「點が限界たり得る總ての方向に對して事實限界となつてゐる」(O. Kraus; F. Brentano, 47) 事を意味する。それに對して物體の表面上の限界は限られた方向に對してのみ限界であるが故に、此の限界のプレローゼは不完全なのである。しかも例えば直方體の頂點と、三角錐の頂點とに於て、兩者共にプレローゼは不完全であるが、前者は後者より多くの充實を有している。そして此の様な限界はある方向から言つて連續體の限界であるが故に、限界の連續體に所屬している方向を連續的に増大して考える事も、減少して考える事も出来る。此の事から不完全なプレローゼには無限に連續的な度が考へられる。⁽⁸⁾即ち「空間の限界のプレローゼに關しては無限の量の相違が示される」(Kale, 171) のである。

以上空間の限界のプレローゼに就てブレンターノの見解を概説したが、此のプレローゼの差異は「限界が連續體を限界付けているところの方向の相違と、方向の多様性に關して」(ibid) 與えられてゐるのである。

時間連續體の限界についても同様にプレローゼの差異が主張されている。「時間連續體の限界に關しては單に一向性 (Einseitigkeit) か、反對方向性 (Gegenseitigkeit) かが觀察されるにすぎぬ」(ibid) 前者の場合としては、それに於て時間連續體が始まるか或は終るところの現在者が考えられている。或るものが時間的に經過する事を始め

る場合の最初の現在者は未來に向つて限界付けられてをり、過去に向つて限界付けられていないが故に、此の現在者の有する限界が、時間連續體を限界付けている方向は一方向である。また或るものが時間的に經過する事を止める場合の最後の現在者は、過去に向つてのみ限界付けられていて、未來に向つて限界付けられていないが故に、此の現在者の有している限界の時間連續體を限界付けている方向は一方向である。それに對して過去現在未來と時間的に經過して行く現在者は過去に向つて限界付けられていると共に、未來に向つても限界付けられているが故に、此のものの限界は二方向即ち反對方向に對して連續體を限界付けている。此れが後者の場合である。従つて兩者の場合現在者の有している限界のプレローゼ即ち充實の度は異なつていなければならぬ。しかも時間連續體に於て反對方向に對して限界付けられている現在者より以外に、多方向に對して限界付けられている現在者は考えられ得ぬから、反對方向に對して、時間連續體を限界付けている現在者は、その限界に關して完全なプレローゼ、即ち完全な充實を有していると言わねばならぬ。従つて「持續するものは全きプレローゼを有している。時間的に始まるもの、或は時間的に終るものは半分のプレローゼを有している。」(Bar, III, 190) 持續している現在者は限界に關して完全な全體のプレローゼを有し、それに對して時間的に終るか、或いは始まる現在者は不完全な半分のプレローゼを有している。⁽²⁾「空間的な限界に關しては無限な量の相違」が考えられ得るのに對して、時間的な限界のプレローゼに關しては、完全な全體のプレローゼと、不完全な半分のプレローゼのみしか考えられない。此の點空間的なものの限界のプレローゼと、時間的なものの限界のプレローゼとは異なつて⁽³⁾いる。而してあるものが時間的に始まつて持續する場合には、此のものの限界は半分のプレローゼ即充實から完全なプレローゼ即充實をもつに到るのである。そしてあるものが時間的に終る場合、此のものの限界は完全な充實から、不完全な半分の充實に減少して行くのである。それ故に、現在者の限界

の充實、即プレローゼに關しても増減減少が存するが、それも不完全な半分の充實から、完全な全體の充實になるか、完全な全體の充實から不完全な半分の充實になるかであつて、その中間の充實の度は存しないのである。以上現在者は自己の有する限界に關して完全な全體のプレローゼか、不完全な半分のプレローゼかを有していなければならぬと言ふ事を概説した。従つて「一つの瞬間が以後のものか、以前のものと全く時間的に關連しない様な瞬間はプレローゼを有していないは不合理であろう。と言うのは以後か、以前のものと全く時間的に關連しない様な瞬間はプレローゼを有していない時間點であり、従つて普遍的なものであり、かかるものは決して存在し得ぬから」(Kate, 317)と言ひ得る。ところで時間的なものは實體及び實體的なものとして現象し、かかる實體及び實體的なものは、時間的なものとしては現在者としてのみ存在し得る。そして此時間的なものとしての實體は現在者として限界を有して現象していなければならぬ故に、プレローゼ即ち不完全な半分のプレローゼか、完全な全體のプレローゼかを有して現象していなければならぬ。此の事は現在者としての實體が時間連續體に所屬し、連續的な關係を有しているものとして現象していると言う事を意味している。此の様にして實體及び實體的なもの（偶有的なもの）が時間的なものとして思惟される場合には、完全な全體のプレローゼか、不完全な半分のプレローゼかを有するものとして思惟せられてゐるのである。此れと同様な事が空間的なものとしての實體及び實體的なものについても言えるのである。實體及び實體的なものが空間的なものとして存在する場合には、時間的なものとしての實體と同様に、限界付けられたものとしてのみ現象するが故に、^(五)即ち限界を有するものとしてのみ現象しているが故に、かかるプレローゼを有して現象していなければならぬ。しかし上述せる如く、空間的な限界のプレローゼには、時間的な限界のプレローゼとは異なつて、完全なものと、無限に異なつてゐる不完全なものが存しているのであるが故に、實體及び實體的なもの（偶有的なもの）が空間

的なものとして思惟される場合には、完全なブレローゼか、無限に異なつた不完全なブレローゼの中、一つのブレローゼを有するものとして、思惟されているのであると言ひ得る。

- (二) 此の點に關して、「球の中心點のブレローゼは球の表面上の點のブレローゼよりも完全である。」(Kate, 72) またクラウドに依つて、「球の内部に於ける點は完全なブレローゼを有して存立している」(F. Brentano, 47) と言われている。此の事から物體の内部の限界 (innere Grenze) は、物體の外側の限界 (äussere Grenze) に對して完全なブレローゼを有していると言ふ事が出来る。

(11) Kate, 72. 参照

- (三) Psy, III, 120. には次の様にも言われている、「あるものが肯定せられている場合、此のものはより以後なるもの、より以前なるものの中、一つのものとしてのみ肯定せられて、他のものとしては否定される場合がある。此の場合には、此のものは半分のブレローゼを以て肯定せられ、半分のブレローゼを以て否定されていると言ふ事を我々は主張するのである。」此の半分のブレローゼを以てする肯定、否定は時間的に始まるか、終るものが半分のブレローゼを有するものとして表象されている事に依るのである。此の點に關してまた O. Kraus: F. Brentano 47, ff. 参照。

- (四) それにも拘らず、時間連續體は空間連續體の限界としての線と類比を有している。線の限界としての點も、時間的なものの限界と同様に半分のブレローゼか、完全なブレローゼかだけを有してゐる (O. Kraus: F. Brentano, 47 参照)。此の爲に時間連續體と線とは類比的に語られ得る。

- (五) 此の點に關して次の様に語られている。「此の空間的なものとして實體 (一次的空間連續體) は一つ或いはそれ以上の限界から言つてのみ存在する事が出来るのである。」(Psy, III, 119) として、「此の空間的な限界は孤立しては、存在する事は出来ないし、孤立しては考えられる事も出来ない。時間連續體に所屬していると言ふ性格が時間瞬間にとつて必然的であると同様に、空間連續體に所屬していると言ふ性格は此の空間的な限界にとつてもまた必然的である。」(Psy, II, 268) と語られてい

る。それ故に空間的なものとしての實體は、此の實體に所屬してのみ存在する事の可能な限界を有するものとしてのみ、現象して來ていると言ふ事は明らかであらう。

以上プレローゼと言う概念を概説したが、プレントナーが實體及び實體的なものの連続性の解明にあたつて使用している概念は、プレローゼと言ふ概念にだけつきるものではなくして、またトレイオーゼと言ふ概念が使用されている。連続性の解明にあたつて此の概念は重大なる役割を果しているのである。クラウスは「プレントナーの連続論はプレローゼとトレイオーゼに關する彼の見解の上に立つ。」(F. Brentano, 47)と語つてゐる。

此のトレイオーゼの現象しているものを空間的なものの領域に求めるならば、此の場合異なつた速度で運動している多くの物體と、静止している物體が先ずあげられ得る。此等の物體に就てプレントナーは次の様に語つてゐる。

「静止せる物體はあらゆる瞬間に於て、全く同じ規定性を所有した、そして所有するであらうところの連続體の時間的な限界としての場所的規定を所有している。然し物體が一つの軌道の上を運動し、そして此の運動に於て、静止している物體が持続的に受容していると同じ其の位置にある瞬間に到達する場合、此の物體は此の位置を次の瞬間には再び失なう。此の場所的規定性がその物體に歸屬するのは他のもろもろの位置をいずれも同じ様に經過しながら占めて行く連続體に所屬するからである。従つて此の限界付けられたものの本性は、静止せる場合の限界付けられたものの本性とは、異なつてゐる。異なつた本性を有する連続體は限界の本性に對して制約的であるが故に、此の限界の本性もまた同じ本性である事は出來ぬ。そこで問題になつてゐる區別が完全なそして不完全なトレイオーゼ (Teliose) の區別なのである。」(Kategorienlehre, 172) 即ちかく異なつた多くの場所的規定を有する時間連続體(運動せる物體)と、同一の場所的規定しか有しない時間連続體(静止せる物體)との差異がとりもなほさず現在のな一つの場所

的規定の連續體を限界付ける仕方を差異、即ち此の場所的規定の有している限界の本性を差異せしめているのである。かく差異せしめられている限界付けの仕方がトレイオーゼなのである。「此處に靜止している點には、此處を通過している點とは異なつた意味での此處 (das Hier) が所屬してゐる」(Kante, 66)と言われている所から見ても、場所及び場所的規定が運動する物體の場所であるか、靜止せる物體の場所であるかに依つて、異なつたものとせられた場所及び場所的規定の本性がトレイオーゼである事は明瞭であらう。

(一) カステイルはブレンターノのトレイオーゼを次の様に説明している。

「絶對的な場所は、それが靜止せる物體の場所であるか、あるいは運動せる物體の場所であるか、又異なつた速度で、種々に變わる方向に運動している物體の場所であるかに應じて、エレメンタールな仕方で變つて来る。ブレンターノは此をトレイオーゼの差異として把握したのである。」(Kat, 333)

上述の引用文に於て靜止の場合には此のトレイオーゼは完全であるに對して、運動の場合には此のトレイオーゼは不完全であると言われているのは、靜止せる物體が同一の場所的規定を有する時間連續體として現象し、此の物を限界付けている場所的規定が變化しない場合に、即ち「物體がある時間の間變化しないで靜止している場合には、物體は自己の場所的規定に關しては完全なトレイオーゼの中にある」(Kante, 172)のに對して、「物體が運動に於てある一つの位置にある瞬間に到達する場合、此の物體は次の瞬間には此の位置を再び失なう。」(Ibid) 即ち此の物體はある場所的規定を所有したかと思つと、次の瞬間には其の場所的規定を失なうからである。従つて靜止せる物體に對して運動せる物體が場所的規定を所有する仕方は、即ち場所に留まる仕方は、不完全であると言ひ得る。それ故に彼は運動を「より少く場所的規定性にあづかる事 (ein weniger an der Orbestimmtheit Teilhaben)」場所に不完全に存在す

る事 (ein unvollkommenes An Orte-Sein) (Kate, 69) と規定してゐるのである。⁽¹⁾ 換言すれば此の事は場所的規定が連續體を限界付けている仕方、即ち場所及び場所的規定が物體の場所及び場所的規定である在り方の不完全性を意味するが故に、此の不完全性はトレイオーゼの不完全性に外ならない。此の様に運動せる物體のトレイオーゼは靜止せる物體のそれに比して不完全なのである。⁽²⁾ しかも「極度の不完全性は思惟しようにも思惟出來ぬ。」「場所的規定にあづかる事の少なさに關して、その少なさを何處までも少なく考へて行く事が出来る。」(Kate, 69) と言われている如く、トレイオーゼの不完全性に關しては無限に多くの連續的に異なつた度が存している。此の不完全性の無限に異なつた度に應じて、無限に異なつた運動の速度が現象してゐて、運動速度の相違の知覺はかかるトレイオーゼの不完全性の差異に基ずいてゐる。此のトレイオーゼが不完全になればなる程、物體はより早く運動してゐると言う事を知覺する。⁽³⁾ それに對して物體の場所的規定のトレイオーゼが完全であれば、此の物體は靜止してゐると言う事を我々は知覺するのである。

(1) Kate, 69 ff. 87, 321 f. Aristoteles und seine Weltanschauung, 37. 参照

(2) O. Kraus; F. Brentano 48, f. 参照

(3) Psy, III, 186. 参照

然しかかるトレイオーゼの完全性不完全性は靜止運動の場合のみならず、運動せる物體の方向の變化、或いは線及び面の方向の變化に於ても現象してゐると彼は主張してゐる。それ故に「異なつた速度、及び異なつた方向もまた此處 (das Hier) の本性を異なつたものにしてゐる。」(Kate, 66) とか「我々が延長せる空間の限界、從つて平面或いは線を比較する場合にさえ、その方向に關してより強い、より弱い餘々の變化について語り得る。」とか……「例え

は彎曲している線の方向は——此の線の方向は絶えず變化しているが故に——直線の方向——此の線の方向は常に同じ方向に留まつてゐるが故に——よりも現實性 (Wirklichkeit) の不完全な度を有している。」とか「より強く彎曲している線は、此の線の方向はより強く變化するが故に、より弱く彎曲している線よりも、より多く不完全なのである。」(Kate, 73)とかと言われているのである。此の完全なテレイオーゼを有している場合は、方向を變えないで一直線に運動している場合か線及び平面の方向が變化しない場合であり、不完全なテレイオーゼを有する場合は、それらの方向が連續的に變化している場合である。テレイオーゼが不完全になればなる程、それらの方向の變化は大きくなるのである。しかし方向變化のテレイオーゼと静止運動のテレイオーゼとは決して同一のものではない。と言ふのは方向のテレイオーゼの完全な場合は静止の場合ではなくして、運動に關する不完全なテレイオーゼを有して、方向を變えないで運動している場合であるからである。方向を變えないで運動している物體は運動のテレイオーゼに關しては、不完全であるが、方向のそれに關しては完全であり、従つて運動の場合に現象しているテレイオーゼと方向變化の場合に現象しているそれとは同一のものではなく單に類比的なものに留まる。「直なる形態に方向と言う言葉を用いる事が許されるとすれば、線と言う種の形態が變化した場合には、その變化は方向の變化と呼ぶ事が出来るであらう。その變化した形態は直なる形態の方向とある關係がつくわけであるから、その方向に多かれ少なかれ近づくと言う事が出来るであらう。そうすればその場合その接近の増減は尙何處までも可能となる。ちようどそれは我々が運動と静止を論じた場合に、そう言う多少を見出したのと同様である。」(Kate, 74)と語られている如く、兩者とも變化を有してゐないものへの「接近の増減」、即ち變化の度が現象してゐるから、換言すれば「時間の中でのもの」の持續 (Beharren) の變化に過ぎぬ經過」(Pst., II, 225) が兩者の場合等しく現象してゐるから、方向と運動とは空間的な

は彎曲している線の方向は——此の線の方向は絶えず變化しているが故に——直線の方向——此の線の方向は常に同じ方向に留まつているが故に——よりも現實性 (Wirklichkeit) の不完全な度を有している。」とか「より強く彎曲している線は、此の線の方向はより強く變化するが故に、より弱く彎曲している線よりも、より多く不完全なのである。」(Käte, 73) とかと言われているのである。⁽¹⁾ 此の完全なトレイオーゼを有している場合は、方向を變えないで一直線に運動している場合か線及び平面の方向が變化しない場合であり、不完全なトレイオーゼを有する場合は、それらの方向が連續的に變化している場合である。トレイオーゼが不完全になればなる程、それらの方向の變化は大きくなるのである。しかし方向變化のトレイオーゼと静止運動のトレイオーゼとは決して同一のものではない。と言ふのは方向のトレイオーゼの完全な場合は静止の場合ではなくして、運動に關する不完全なトレイオーゼを有して、方向を變えないで運動している場合であるからである。方向を變えないで運動している物體は運動のトレイオーゼに關しては、不完全であるが、方向のそれに關しては完全であり、従つて運動の場合に現象しているトレイオーゼと方向變化の場合に現象しているそれとは同一のものではなく單に類比的なものに留まる。「直なる形態に方向と言う言葉を用いる事が許されるとすれば、線と言う種的形態が變化した場合には、その變化は方向の變化と呼ぶ事が出来るであらう。その變化した形態は直なる形態の方向とある關係がつくわけであるから、その方向に多かれ少なかれ不定に近づくと言う事が出来るであらう。そうすればその場合その接近の増減は尙何處までも可能となる。ちようどそれは我々が運動と静止を論じた場合に、そう言う多少を見出したのと同様である。」(Käte, 74) と語られてゐる如く、兩者とも變化を有してゐないものへの「接近の増減」、即ち變化の度が現象してゐるから、換言すれば「時間の中でのものの持續 (Beharren) と變化 (Veränderung) 經過」(PST, II, 225) が兩者の場合等しく現象してゐるから、方向と運動とは空間的な

ものの異なつた規定であるにもかかわらず、共に變化の度が存するが故に、兩者にはトレイオーゼの現象が存するわけなのである。クラウスは「ブレンターノがトレイオーゼと名付けているところのものは變化の度より以外の如何なるものでもない」(F. Brentano, 48)と語つてゐる。従つて「變化」のみがあつて「變化の度」が存しない場合には此の様なトレイオーゼの現象は存しないのである。「變化」のみが存して「變化の度」の存しないもの例えば空間、時間連續體そのものをブレンターノは第一次的連續體 (Primäre Kontinuum) 即實體と名付けてゐる。「過去現在未來から成立つてゐる連續體としての時間の相違は一次的連續體の性格を有してゐる」(Ps., II 225)と言われ、此れに對して「時間の中でのものの持續と、變化する経過とは二次的連續體 (sekundäre Kontinuum) の性格を有する」(ibid)と言われている。即ち時間空間連續體を一次的連續體(實體)としてその上のみ可能である派生的な二次的連續體(偶有的なもの)にだけ「變化の度」は存するのである。従つてクラウスは「變化の定度性と、等度性とは全ての一次的連續體に共通なのであり、これに對して二次的連續體に於ては経過は速かつたり、遅かつたりする事になる」(O. Krus: F. Brentano, 48)と語つてゐる。カステイルもまた此の様なトレイオーゼは一次的時間連續體に對して派生的な「二次的連續體にのみ現象してゐるにすぎぬ」(Käte, 333)と語るのである。

カステイルは此の點に關して次の様に言う。「トレイオーゼの區別はただ單に二次的連續體にのみ現象してゐるにすぎぬ。換言すれば、空間を收容してゐるところのものに、即ち空間的な偶有的なものにのみ現象してゐるにすぎぬ。例えば場所を満している性質的なものは二次的に連續的なのである。物體が場所實體である限り、即ち一次的に連續的である限り、場所種から場所種への變化が問題であつて、此の變化は變化の度の如何なる差異をも示していない。然し物體が静止せる場所的なものとして、或は運動している場所的なものとして存在する限り、即ち二次的に連續的である限り變化の度の區別が生じて来る。此の場所的なものが二次

的に連續的に變化するものであると言う事は、場所的なものが全ての物象と同様に時間的に經過するものであると言う事と關連してゐる。(Kate, 333) 此の事より運動靜止者及び方向變化者は一次的場所連續體に對して、偶有的なものとして(此の點に關しては Kate, 320 参照)二次的連續體であると共に、時間の中に於ける變化者として、一次的時間連續體に對して二次的連續體なのである。従つてトレイオーゼは此の様な二次的連續體にのみ存して、一次的連續體としての空間連續體、時間連續體には存してゐないであらう。

(I) Kate, 66, 322. O. Kraus; F. Brentano, 49 参照

(II) Psy, II, 305. Kate, 317 f, 338. 参照

(III) O. Kraus; F. Brentano, 49 参照

以上主として空間的なものの領域に現象しているトレイオーゼに就て概説したのであるが、思维的なものの領域に於てもまたトレイオーゼが主張されている。ブレンターノは思维の領域に於ける完全なトレイオーゼに關して「若し神が我々を、我々がメロディなり話を聞くか、或いは極めて活潑な舞踏を眼前に見たかしたその瞬間から、此等全ての志向關係のみならず、全ての他の志向關係に於てもまた、一時間の間何等變化しないままに留どめ置いたと假定するならば、我々は此の一時間と言う時間を通じて、我々の思维の點では完全なトレイオーゼの中に在るであらう。我々が此の靜止の最初の瞬間に生き活きたある心的變化の存することを信じていたとしても我々はその信念をもやはり此の一時間の間、保持するであらう。」(Psy, III, 107)と語つてゐるのである。此の事から思维の完全なトレイオーゼの場合は我々が思维作用を有してゐない場合ではなくして、思维作用を有してゐて、それが時間の中で變化しない場合、即ち無變化的に思维作用が保持されている場合なのである。従つて思维に關してトレイオーゼの完全な場合はクラウスの語る如く「思想の無變化的時間的持續 (unverändertes zeitliches Beharren eines Ged-

unkens)」の場合であると言ふことが出来る。それ故に「思想の變化が増大すればする程、トレイオーゼの度は小さくなるのである」(Pst., III, 186)しかも「我々が感覺的に知覺しているところの心的なものもまた連續的なものとして示される」(Pst., III, 82)のであるから、一般に思惟作用も連續的なものであると言ひ得る。それ故に此の様な思惟作用は時間の中に於て變化するものとして、一次的時間連續體に對して二次連續的なものとして現象してゐるのである。

(1) Pst., III, 81 ff. 參照

以上トレイオーゼは時間、空間に關する二次的連續體にのみ存して一次的連續體には存しないと云ふ事を概説して來た。然るにブレンターノは經過的に變化して行くものとしての一次的時間連續體の特殊性は不完全性にあるとなし、「時間連續體は完全な仕方ではなくして、不完全な仕方では存在してゐる」(Pst., III, 258)と論じてゐるけれども、此の時間連續體の不完全性は、一見一次的時間連續體のトレイオーゼの不完全性の如く見えるにしても、實は此の不完全性はトレイオーゼの不完全性ではないのである。と言ふのは上述せる如く、一次的時間連續體には「變化の度の多少」が存しないからである。「時間經過そのものは増大減少の全く在しないところの變化を示してゐて、その時間的な變化は可變的ではなす」(O. Kraus; F. Brentano, 48)のである。では一次的時間連續體の特殊性たる此の不完全性がトレイオーゼの不完全性でないならば、此の不完全性は一體何なる不完全性なのか。此の不完全性について彼は次の様に説明してゐる。「現在者は連續體に所屬してゐる。此の連續體はそれから見て連續體が現在に存在しているところのその一つの要素から言つての外は、何如なる他の要素から言つても存在するのではなく、連續體の唯一つの要素のみが存在する事に依つて、連續體は存在するのである。……此の要素はそれ自身では存續しないで、唯だ連續體に所屬してのみ存續してゐる。此の場合の特殊性を表現するならば、此の連續體は完全な仕方ではなくして不完全な仕方では存在してゐる。換言すれば連續體の總體性 (Totalität) から言つて存在してゐるのではなく、唯一つ

の限界から言つて存在しているのであると言ふ事が出来る。』(Psy. II, 257 f.) 時間連續體が存在し得るのは現在者から言つてのみであり、現在者が限界付けているところの未だ存在しないであろう、或は嘗て存在した全ての他の要素、(未來者或いは過去者)から言つて存在しているのではない。此の點「空間連續體がその總體性 (Totalität) から言つて現に存在している。』(Psy. II, 259) に較べるならば時間連續體は不完全なのである。此の様に不完全な仕方で存在していると言ふ事は、此のものが絶えず經過的に變化するものであると言ふ事を意味する。従つて此の不完全性は上述して來たトレイオーゼの不完全性とは異なつた意味での不完全性なのであり、物體及び思维のトレイオーゼの完全な場合にも、不完全な場合にも、全てに共通した不完全性なのである。即ち全てのものが時間的なものとして理解される限りに於て有している不完全性なのである。此の不完全性は一次的時間連續體たると、二次的時間連續體たるとを問はずいすれにも所屬しているのである。それ故に實體が時間的なものとして思维される場合には、一つの限界から言つて存在し、總體性から言つては存在しないと言ふ此の不完全性を有するものとして思维されていなければならぬ。それに對してトレイオーゼは二次的連續體に於てのみ可能であるが故に、トレイオーゼの完全性・不完全性は實體を含んでゐる限りでの偶有的なものにだけ現象するのである。それ故に偶有的なものが時間的なものとして思维される場合にはトレイオーゼの完全性・不完全性ともう一つの不完全性即ち一つの限界から言つて存在し總體性から言つては存在しないと言ふ上述の不完全性とを有するものとして、思维されていなければならぬ。

(1) Psy. III, 121 f. Kantstudien, XXV, Zur Lehre von Raum und Zeit. 参照

「附記」 此の小篇は文部省人文科學研究費の交付を受けて、田邊重三先生のなされつつある「西洋近世哲學に及ぼせる自然科學の影響」研究の協力者としての私のフレンターノ研究の一部である。

尙此の小篇が不完全ながらも、少しでも報告らしくなつたのは、先生の巨細にわたつての御教示と御訂正とに負うてゐるのであつて、先生に心からの感謝を捧げる。